

橋本槇矩 著

『青い薔薇——キプリングとインド』



第一部小説部分より一カ所引用する。自分がある小説を書いたことの必然に触れ、「わたし」（一人称の語り手としてのキプリング）がその必然のありようを「これを書かなくては一步も前に進めないという意味での必然と言い換えてもよい」（本書188頁）と説明するくだりだ。強調すべきは、この一文の重要性、そして「わたし」すなわち「キプリング」の顕在的思い入れの強さと小説「インドの真夏の夜の夢」の書き手の潜在的思い入れの強さばかりでなく、およそテキスト中の一文なるものは、そうした思い入れの勢いを駆って、書き手がそれを小説と言えれば小説となり、評論と言えれば評論となり、「研究書」の一章と言えれば研究論文となるという、おかれた磁場しだいで文章がどうしても変幻するということの不思議だ。この一步先には、キプリングが面会したゴービンドの「話というものは語られているあいだはどんな話でも真実なのだ」（42頁）という言

葉すら絡もう。だから吉田健一が評論を書いている、いつの間にか小説になっていたというようなことが平気で起こるし、英文学者がキプリングのテキストと周辺の書物に耽溺し、インドで地図を広げているうちに、いつの間にかキプリングになりきり小説を書き出していたということも、自然なことなのである。

読者はそれにより多くを手にする。第一に、インドにしてもキプリングにしても、カフカの意味のこれら「城」さえ、この小説によって実にわかりやすいものになっている。著者がインドをかの地天竺として遠景化するのではなく、『檜山節考』や安吾の世界を読者に想起させるような筆致(57頁)で話を進めるからだ。第二に、キプリング最大の難問、帝国主義と作家の関係、そして「帝国の守護者」(201頁)とまで自認する作中のキプリングとキプリングを読む評者を含めての日本の読者との関係もその輪郭を露にする。著者の高弟で早逝の惜しまれた桑野佳明が、かつて日本キプリング協会の講演でその問題に触れ、本国の協会では、「そういう時代だった」という発言が聞かれたという話を紹介されたことがあったが、著者はこの問題に一見複雑な、しかし読みやすい手続きをもってあたる。まずは「わたし」であるキプリングの十六歳からの第二のインド経験を克明に描く。ラホールやシムラのアングロ・インディアン風俗は婿探しに奔走するオースティン世界にまで近づき、哀れキプリングの妹は気の進まぬ結婚に至る。キプリング自身も叔父バーン＝ジョーンズらに代表される「宿命の女」崇拝の文学風潮の影響下、フローラなる画家志望の女性の虜になる。ソーホーやシムラのさまざまな場所に出入りしつつもなお。インドでの記者としての経験記にやがて作家が実際に書いた短編群

に関わる裏話が入り込んでくる。キプリングはハーディやギッシングが経験し得なかった広い世界を経験し作品に取り込む(195頁)。

だがそれだけでは、この小説は世紀転換期のディケンズとなったかもしれぬ作家を扱ったややペダンティックな作品に終わっていたかもしれない。圧巻は、その「わたし」が自分にとってきわめて重要なインドをいとも簡単に後にするところから始まる。きっかけとなったアラーハーバードでの事件にさりげなく触れるのみで、そこがまたよく、マンダレー、日本、アメリカを経てさっさとリヴァプールに戻り、二度とインドの地を踏まない。インドを去り、一八八九年、ロンドンでの生活に入り、「わたし」は初めて「宿命の女」(195頁)、「帝国」、「男の友愛」(196頁)、「植民地」などといった二十一世紀までわれわれが引きずっている問題の分析に着手する。ここは本当にキプリングが著者に乗り移っている。あるいは、その反対か。小説なので、最後にびたりと腑に落ちるという点だけを指摘し、結末は控える。

では、本書第二部「キプリングを巡るインドの旅」は何であるのか？ 評者はこれをナボコフ『青白い炎』の注よろしく、第一部のアンコールとして大事に読んだ。(松柏社、2012年6月、四六判 vi+336頁、3,800円)

——梅 正行 (中京大学教授)